

ブルーストにおける読書の問題

想起と忘却をめぐって

浅間 哲平

はじめに

「ブルーストにとっての読書はなんであったのか」。ポール・ド・マンはこのような問いを立て、読むという営為について考察している¹。

この問いの契機になっているのは、次のようなブルースト自身の読書観である。「読書が私たちのなかに残すもの、それは私たちが読書をした場所や日々のイメージである²」。そのイメージは、かつてある書物を読んだという経験を読者の心のなかに呼び戻し、それがやがてべつもの形の書物となる、とブルーストは続ける。「見知らぬ記号からなるその心の中の書物については、それを読もうとしても規則そのものがないのでだれも私を助けることができなかつた」。経験は「記号」となって読者の「心の中の書物」となり、私たちの知る文字で書かれていない以上、これを理解可能なものとして定着しようとするれば、それはなにかを新しく作り出す行為へと近づいていく。「このような読書は、創作する行為によって成り立つものなのだった³」。マルセル・ブルーストは、逆説的にも、読書とは「読むこと」である以上に「書くこと」なのだと言っている。

ポール・ド・マンは、以上のようなブルーストの読書観を踏まえ、「読書についてなにを語っているか」という上の問題に対して、『失われた時を求めて』が描き出す読書の場面の精緻な分析をもって答えようとしている。主人公は復活祭の休暇を大叔母の家で過ごすため田舎町コンブレーにやってき

¹ Paul de Man, « La lecture (Proust) », dans *Allégories de la lecture* (1979), traduit par Thomas Trezise, Éditions Galilée, coll. « La philosophie en effet », 1989, pp. 83-106.

² *Contre Sainte-Beuve*, précédé de *Pastiches et mélanges* et suivi d'*Essais et articles*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1971, p. 172. 以下タイトルの略号 (CSB, PM, EA) の後にアラビア数字で頁数を表す。すべての翻訳は本論文の著者によるが、ブルーストの作品には数多くの翻訳があり、それらを参考にさせていただいたことをここにお断りしておく。

³ *À la recherche du temps perdu*, 4 vol., Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1987-1989, t. IV, p. 458. 以下タイトルの略号 (RTP) の後に、巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で表す。

ている。そこで、「自分の部屋」や「庭のマロニエの木の下」で題名の明かされない書物を一人でくつろぎながら読む。そのような『スワン家の方へ』の一場面である⁴。しかし、これはある種の理想的な読書のみを問題にしている点で不満が残る。ド・マンが分析の対象とする「幼年時代の魅力的な読書」は、プルーストが 1905 年に発表した評論「読書について」⁵で描かれた体験を下敷きにして書かれた場面で⁶、『失われた時を求めて』全体の中では限定的な役割を担うにすぎない。

小説の一場面となったとは言え、評論「読書について」に歴史的起源があるこの経験をもってして、『失われた時を求めて』において様々な形で繰り返される「読む」という主題の代表と考えるのは特殊なアプローチであると言わざるを得ない。評論が主題の一般的な性質を提示することを目指すすれば、小説は具体的な場面を設定し、そこに流れる時間の中で主題の固有な性質を考証させるものなのだから。

本論では、主人公が成熟した段階で経験する読書を対象に、『失われた時を求めて』における読書経験が上とは異なる様子で描かれていることを示したい。その上で、小説における具体的な設定に注目し、時間との関係から主人公の読書を想起の問題として論じたい。最後に、読書が与える影響について、その中でも特に主人公によって明示されないもの、つまり忘れられてしまっているものについて検証する。幼年時代の読書とは異なり、壮年時代の読書には、その前に起こる出来事がなんらかの形で反映しているものだ。このような一連の検証をもとに、小説の中で読書がいかなる機能を担っているのか考えてみたい。

⁴ *RTP*, t. I, pp. 82-87. プルーストにおける読書の問題を論じる場合、この場面に注目することが一種の慣例になっている。例えば次の論文を参照。Anne Simon, « Proust et « l'acte psychologique original appelé Lecture » », *Études de linguistique appliquée*, nouvelle série, vol. 119, juillet-septembre 2000, pp. 331-344.

⁵ *PM*, pp. 160-194. 引用は 172 頁より。この論考は 1905 年 6 月 11 日号の「ルネサンス・ラティエヌ」誌に掲載された。1906 年に出版されるジョン・ラスキン『胡麻と百合』の翻訳につけられた序文として再掲され、さらに 1919 年に『模作と雑録』に「読書の日々」のタイトルで収録された。その都度、文章は修正されたが、本論では『模作と雑録』のテキストを採用する。

⁶ この二つの場面の関係については以下に指摘がある。Antoine Compagnon, « Proust 1, contre la lecture; 5. La lecture ou la vie », dans *La Troisième République des lettres*, Éditions du Seuil, 1983.

1. 『見出された時』における二つの読書

本論でとりあげるのは子供の時に経験する理想的な読書ではなく、小説最終巻『見出された時』で主人公が一定の年齢に達したときに行う読書である。『見出された時』の前半⁷を三つに分けて考えると、まず語り手がタンソンヴィルに滞在する場面から始まる。コンブレーからほど近いこのスワンの地所で、語り手の友人サン・ルーと結婚して落ち着いているスワンの娘ジルベルトから借りるといふ形で、「私」はゴンクール兄弟の『日記』を読むことになっている。この場面でプールの小説に挿入されている長い文章はゴンクール兄弟によって書かれたと紹介されているが、よく知られているように、これはプール自身ゴンクールの文体を真似て書いた模作（パステージュ）であり、そこにはゴンクールが『失われた時を求めて』の主要登場人物の一人であるヴェルデュラン夫人のサロンを訪れたという設定で雑感が記されている（以下、本論が「ゴンクールの『日記』」と記す場合、この模作を指す）。「私」は、かつて自分も訪れたそのサロンを詳述するゴンクールの技に舌を巻くと同時に、志していた文学とは所詮このような「観察」や「聴き取り」の記録に過ぎないのかと失望する⁸。

第二の場面では、長い療養所生活を終え、パリにもどった「私」が経験する第一次世界大戦下の街の様子が描かれている。かつて社交界を先導していたシャルリュス男爵が売春宿で自らを鞭打たせ落ちぶれている姿を盗み見て、世界が退廃し、変容していくことが予告される⁹。

第三の場面では、二度目の療養生活を終え、ゲルマント大公夫人のサロンを訪れる。「私」はゴンクールの『日記』を読んだときに抱いた文学への幻滅にとらわれ続けているが、ゲルマント家の邸の前で敷石につまずくことでかつての記憶が突然蘇り、意志とは関係なく想起されたこの記憶がもたらす幸福感はどこからくるものなのかと考えを巡らせる。いくつかの無意志的想起が立て続けに起こることで、文学が表現すべきものはこのような過去と現在に共通する印象であり、本稿の冒頭で引いたように「心の中にある書物」を読み解くことで、自らの文学を創造することができるのではないかと主人公は考えるに至る。こうしてひとり考え込みながら邸に入り、気がつくど

⁷ 後半は「仮面舞踏会」と呼びならわされているゲルマント大公夫人のサロンで年輩の人々を目撃する場面。鈴木道彦訳『見出された時』（集英社文庫、2007年）の分け方にもとづく。

⁸ RTP, t. IV, pp. 275-301.

⁹ RTP, t. IV, pp. 301-433.

ルマント家の図書室の蔵書からジョルジュ・サンドの小説『フランソワ・ル・シャンピ』を手にとっている。子供の頃、言いつけに背いて母親が寝室に来るのを待っていて一悶着を起こしてしまったが、その興奮を鎮めようと声に出して読んでもらったのが、このサンドの田園小説であった。ここでの読書は、少年時代の読書の経験を不意に喚起するものでもある¹⁰。

『見出された時』のこの二つの読書の場面は、戦時下のパリの描写を挟んで、対をなしている。ブルーストは、1909年にジョルジュ・サンドの作品を読む場面を構想し、それを小説の最初と最後（つまり、最終的に『スワン家の方へ』と『見出された時』になった箇所）に分割することにした。その後で（1915年以降）、ゴンクールの模作を書き、小説の終盤で主人公が『日記』を読む場面を設定した。この執筆順序を知った上で、ゲルマント大公夫人のサロンを訪れる第三の場面を改めて読んでみると、ゴンクールとサンドを読む二つの場面が結びつけられていることは明らかである。

「ゲルマント家の図書室に入る」主人公は、「ゴンクール兄弟がそこにあるということで素晴らしい初版本について言及していたことを思い出した」と述べて、タンソンヴィルで読んだ『日記』の一節を想起する¹¹。蔵書の中から偶然手に取った「他の書物と同じ赤い表紙¹²」のジョルジュ・サンドの書物は、ゴンクールが愛でる貴重書の数々とはおよそ反対の物であると言ってよい。このように図書室に入ってすぐ、ゴンクールの『日記』について主人公が言及するものの、以下、『フランソワ・ル・シャンピ』について考察する長い一節の中でゴンクールという名前はいっさい出てこない¹³。しかし、すぐ後に述べられている「『ものを描写する』ことで満足する写実的と称する文学」と「主観的であるがゆえに伝えることができないエッセンス」を含むサンドの文学¹⁴を相対させる着想は、「写実主義者」ゴンクールと「理想主義者」ジョルジュ・サンドの比較の上に成り立っていることは明らかである。そのように考えれば、「文章を読むためではなくその彩色を楽しむため

¹⁰ RTP, t. IV, pp. 433-496. ブルーストは無意志的想起の一つとしてこの読書を考えていたとするのが一般的であるようだ。例えば、タディエの浩瀚な伝記にはそのような指摘がある。Jean-Yves Tadié, *Marcel Proust. Biographie*, 2 vol., Gallimard, coll. « folio », 1996, t. I, p. 774. 必ずしもそのように言えないことは、以下で論じる。

¹¹ RTP, t. IV, p. 461. ゴンクールの『日記』には「もともとナポレオン一世がもっていたとされる数冊の本を、反ボナパルト主義を自称していたにもかかわらず、ゲルマント侯爵は所有している」とスワンが指摘している箇所がある (RTP, t. IV, p. 295)。

¹² RTP, t. IV, p. 463.

¹³ RTP, t. IV, pp. 461-466.

¹⁴ RTP, t. IV, pp. 463-464.

に」本を手取る「愛好家」の例は¹⁵、一般論として次に挙げられているものの、ゴンクールを念頭において主人公が引き合いに出したと考えるのが自然だろう。タンソンヴィルではゴンクールの『日記』のページを無造作にめくって、そこに描かれる事物をもう一度見たいという欲望にかられるわけだが、ジョルジュ・サンドの本は、愛書家の蒐集品になぞらえられているものの、ここでそれとまったく逆の反応を引き起こしている。「精神によって残されたイメージが同じ精神によってどれほど簡単に消し去られてしまうか分かりすぎるほど分かっている」ので「私はこの本をこれから読むということはないだろう¹⁶」。主人公はそのように述べている。ジョルジュ・サンドの本を手にする主人公の頭の中には、かつて読んだゴンクールの作品が思い浮かべられていることは間違いなさそうだ。

ひとつはスワン家の蔵書から、もうひとつはゲルマント家の蔵書から取り出された書物を読む主人公の目には、この二つの読書は対照的なものとして映っている。ゴンクールは観察や聴き取りをもとにした「写実的な」文学であり、サンドはなにものにも還元できない「主観的な」文学であると主人公は考え、その結果、ゴンクールの『日記』に幻滅し（「文学は私の信じてきたものではない、そのことが悲しく思われた¹⁷」）、ジョルジュ・サンドの『フランソワ・ル・シャンピ』には、逆に、励まされることになる。「私の人生の目的、そしておそらくは芸術の目的さえもが不意に照らし出された¹⁸」。『見出された時』は、このような物語であるため、ゴンクールの『日記』は「乗り越える」べきものとして¹⁹、サンドの小説は「決定的な衝撃」として²⁰、主人公の文学修行の中に位置づけられてきたのだ。

2. 想起としての読書

しかし、この対立は見かけだけのものに過ぎない。例えば、この二つの場面と比較しうるものとして、既に取り上げた『スワン家の方へ』で書物を読む場面が挙げられるが、それと対照すればサンドの作品の読書も、ゴンクー

¹⁵ RTP, t. IV, p. 466.

¹⁶ RTP, t. IV, p. 466.

¹⁷ RTP, t. IV, p. 287.

¹⁸ RTP, t. IV, p. 465.

¹⁹ Annick Bouillaguet, *Proust et les Goncourt – Le pastiche du Journal dans Le Temps retrouvé* –, *Lettres modernes*, coll. « Archives des Lettres modernes », 1996, p. 102.

²⁰ Volker Roloff, « François le Champi et le texte retrouvé », *Cahier Marcel Proust*, n° 9 (*Études proustiennes III*), 1979, p. 260.

ルの作品の読書も、どちらも過去にかかわるものであることは一目瞭然である。二つの読書は、主人公に過去を思い出させる点で一致している。

『見出された時』で描かれている読書は、現在の経験としてではなく想起の問題として現れてくる。想起という機能をどちらも持つ、そのように考えるならば、ゴンクールやサンドを読む経験は、正反対のものとしてあるのではなく、どこかに相通じるところがあるのではないか。二つの読書は『失われた時を求めて』の「私」の中でどのように理解されているのかをここからは考えてみたい。

この点を見ていくために、まず無意志的想起と意志的想起の違いについて確認する必要がある。無意志的想起は過去の経験を他愛もない偶然を契機として思い出すことによって成立するものであって、そのきっかけとなる感覚の重大さを問題にするものではない。まず、主人公が経験するのは、ゲルマント大公夫人邸の中庭にある敷石でのつまずきであり、それによってヴェネツィアのサン＝マルコ寺院の洗礼堂の中で同じようにつまずいたという記憶が蘇る。続いて、大公夫人の給仕がうっかりスプーンを皿にぶつけてしまうことで、いつか鉄道員が車輪をハンマーでたたいていたときに似たような音を聞いたという過去が想起される。さらに、持ってこられたナプキンを触ることで、バルベックのホテルで口をぬぐうために手にしたタオルが同じような感触だったということを思い出す²¹。ここで想起のきっかけとなる所作は、主人公のかつての経験の中で特に重要な意味を担うものではない²²。また『見出された時』でその思い出を想起するときも、偶然、当時と似たような所作をすることになったというふうに説明されている。それがきっかけとなって、ヴェネツィアやバルベック、あるいは名前のわからない鉄道の止まっている場所で過ごした日々「私」が感じた些細な印象を想起させるだけのものだ。これらの所作は、つまり、触媒でしかない。

逆に、意志的想起とは自分で意志を働かせてある記憶を再現する以上、その内容が記憶の中に保持されていなければならない。また、保持されているのだから、そのきっかけとなる媒介は必要ない。意志的想起で主人公が思い

²¹ RTP, t. IV, pp. 445-447.

²² 『見出された時』で列挙されるこの主人公の過去の中で小説の具体的な箇所にはさかのぼれるのはバルベックの場合だけである (RTP, t. II, p. 33)。主人公は小説に描かれていない過去を想起している。『消え去ったアルベルチーナ』で主人公はヴェネツィアを訪れるがサン・マルコ寺院でつまずくという記述はない。鉄道の情景は、これが小説のどの場面に対応するのか明らかでない。

出す「コンプレー」は、いつも、同じ時刻と同じ場所の記憶であって、常に同じ出来事の記憶が喚起されるとプルーストは述べている²³。

過去にあった出来事が些末であれば、それは忘れられ、忘れられるからこそ無意志的に想起されることが可能になる。その反対に、過去の出来事が重大であれば、それは忘れられることなく記憶の中に留まり、意志的に喚起されるものとなる。意志的想起は、常に精神において現前させることのできるものとして考えられているが、無意志的想起は「忘却」に近いと言うベンヤミンは、このような意味で正しい²⁴。

以上を踏まえると、三つの無意志的想起の後で思い出されるジョルジュ・サンドの小説の場合、「本に書かれた文章は邪魔に²⁵」なり、「本の背」や「紙の肌理」が想起のきっかけになっていて、主人公の目には「本は物として機能している²⁶」のだから、問題となるのは書物の内容ではなく、読むという所作そのものになる。物としての本を手に取り開くという行為が無意志的想起のようなものとして提示されているのだろう。

だから、ジョルジュ・サンドの小説に読まれる内容とは「謎」そのものなのだ。『スワン家の方へ』の記述からわかる『フランソワ・ル・シャンピ』の内容は、「粉ひきの女房と子供のどちらの態度にも奇妙な変化が生じる」物語であるということで、そこには主人公には理解できない「深い謎」だけが残るとされていた²⁷。同じ理由で、成長した「私」は『見出された時』においても「ママンがジョルジュ・サンドのこの本を読んでくれたときに、『フランソワ・ル・シャンピ』の主題のなかには説明のつかないなにかがあった」と言っているのだし、「文学が本当に神秘の世界をもたらすと思わせてくれたあのタイトル²⁸」だけを読むことになる。

しかし、書物の内容を問題とせずに読むという所作だけを問題にすることが果たして可能なのだろうか。読書という経験において、読むという所作と書物の内容は、不可分なものなのではないか。実際のところ、ジョルジュ・サンドの『フランソワ・ル・シャンピ』は、母と拾われた捨子（シャンピ）に芽生える恋心とその主題であり、母と子の親子関係を越えた愛情というそ

²³ RTP, t. I, pp. 9-43. 特に 43 頁を参照。

²⁴ Walter Benjamin, « L'image proustienne » (traduit par Rainer Rochlitz), dans *Œuvres*, Gallimard, coll. « folio essais », t. II, 2000, p. 136.

²⁵ RTP, t. IV, p. 464.

²⁶ RTP, t. IV, p. 464.

²⁷ RTP, t. I, p. 41.

²⁸ RTP, t. IV, p. 462. 強調は引用者による。

の内容こそが、ブルーストの主人公の読書の記憶の記憶を暗に支えていると考えるのは自然なことだろう²⁹。そして、もしそうであるならば「私」は、母親との忘れたい記憶を意志的に想起しているということになる。

ジョルジュ・サンドの小説とは逆に、ゴンクールの『日記』の読書の場面では読むという所作ではなく、読まれる内容そのものが問題となっている。コンブレーを意志的に想起するとき同じ時刻と同じ場所が蘇るように、『日記』はゴンクールがある特定の日に訪れた特定の場所（ヴェルデュランのサロン）を主人公の目の前に提示する。この読書は、意志的想起のようなものとして考えて良さそうである。

『日記』に描かれるものの中で特に主人公が目をつけているいくつかの対象を見てみると、ゴンクールはヴェルデュラン邸の近くに装身具店プチ・ダンケルクがあることを指摘し、その歴史について語っている。邸内に入ると、ヴェルデュランが次々と出してくる皿や銀器・食器の詳細な描写がある。「名陶工の芸術まったく掛け値なし」という「雍正帝時代の皿」、「ザクセンの皿」、「セーヴルの皿」、「成化帝時代の見事な皿」、さらには「銀器」と「ヴェネツィアングラス」などが次々と事細かに描写される³⁰。これを読んだ『失われた時を求めて』の主人公は、当時は価値がないと判断したヴェルデュランの邸に「また行きたい」と感想をもらしている。

ゴンクールは、ヴェルデュラン家の招待客に関する話からも逸話を紹介している。例えば、ヴェルデュラン夫人の長い台詞によって画家エルスチールがいかにしてコタール夫妻の肖像画を描くための発想を得たのかを知ることができる³¹。あるいは、ヴェルデュラン夫人が身につけている真珠のネックレスについて、ゴンクールの『日記』では夫妻の招待客のひとりシャルル・

²⁹ ブルーストの小説の主人公の母が「愛の場面」を読み飛ばしてしまうことでこのような状況が生まれる。この点については後述する。

³⁰ RTP, t. IV, pp. 289-290. 「成化帝」とした「*Tching-Hon*」は、「赤紅」を指す「*chi hong/ch'ih hung*」と考えて「赤絵」とする版もあるが（プレイヤッド版や集英社文庫版）、ちくま文庫版やフラマリオン版のように、この明朝の皇帝とみなすのがよさそうだ。というのも、ここに挙げられた皿（「雍正帝時代」「ザクセン」「セーヴル」「成化帝時代」）はすべてエドモン・ド・ゴンクールの『芸術家の家』からとられていて、そこでは「*Tching-hoa*」の綴り字でこの皇帝を意味しているからだ。ちなみに「雍正帝」は「*Yung-Tching*」の綴りで記されており、ブルーストはこれら中国の皇帝の名をゴンクールと違った綴りで書くことで、揶揄しているのかもしれない。Edmond de Goncourt, *La Maison d'un artiste*, 2 vol., Dijon, L'Échelle de Jacob, t. II, p. 229 et p. 250.

³¹ RTP, t. IV, pp. 292-293.

スワンがその由来を開陳している³²。アンリエット・ダングルテールからラ・ファイエット夫人へと渡り、ヴェルデュラン夫人が購入したのだが、邸の火事で真珠の色が黒ずんでしまったという挿話である。これを読んだ主人公は、コータル夫妻やスワンにさらにその詳細を問いただしたいと感じる。

主人公は、ゴンクールの『日記』なかでも特に「未刊の一冊³³」を読んだと言って初めてそれを読んだことを強調しているのだから、かつてその書物を読んだという記憶を想起しているわけではない。この点では、『フランソワ・ル・シャンピ』を読んだことを思い出すのと、ゴンクールの『日記』を読んで過去を想起するのはまったく異なる経験であるように思えるし、ゴンクールの『日記』は描かれている内容によって過去と結びついているのであって、読むという所作と想起は無関係のようにも見えるかもしれない。

しかし、ヴェルデュラン夫人のサロンで、主人公は以下のような言い方で、これから読むことになる書物の性質を予告している点は指摘しておいてよいだろう。ヴェルデュラン夫妻のようなブルジョワの所有する平凡な食器には興味はないけれども、「デュ・バリー夫人が持っていた食器の見本のようなものであれば見たい」と言う「私」は、それが仮に「版画であってもよい」、そう述べるのだ³⁴。奇妙なことに、「デュ・バリー夫人所蔵の銀食器」がどのような模様をしているのか知りたいという「私」の欲望は、やがてゴンクールの『日記』にあるヴェルデュラン所有の銀器についての記述（「愛妾デュバリー [ママ] ならばすぐにそれとわかるであろうリュシエンヌの庭のあの銀梅花の枝をめぐらしてある銀器³⁵」）を読むことで満たされる。つまり、ゴンクールを読む場面では、『囚われの女』で行われ損ねた読書が達成され、読まれなかった書物が想起されていると言ってよいだろう。『失われた時を求めて』の主人公は、ヴェルデュラン夫人のサロンで読みたいと思った本があって、それを不意に思い出すことで『日記』の中でも特にゴンクールによるヴェルデュラン邸訪問が描かれたこの箇所を選んだと考えられる。

通常、ジョルジュ・サンドの小説は、無意志的想起の一環としてかつて読んだという記憶を喚起する、つまり読むという所作に結び付けられてきた。反対に、ゴンクールの『日記』は、意志的想起を促すものとして、そこに描かれている内容に結びつくとしてきた。だが、以上の考察からは、ジョル

³² RTP, t. IV, p. 293.

³³ RTP, t. IV, p. 287.

³⁴ RTP, t. III, p. 787.

³⁵ RTP, t. IV, p. 290. リュシエンヌはパリの郊外の地名で、そこにルイ 15 世がデュ・バリー夫人に贈った館があった。

ジュ・サンドの小説では、書物の内容が主人公の読む（ゲルマント邸での再読）という所作に一定の影響を与え、ゴンクールの『日記』では、読むという所作（これから読みたいという欲望）が、書物の内容を左右していることがわかる。いずれの場合も、読書においては、その所作と内容は不可分なものとしてプルーストは提示しているのだ。読書を媒介とする想起は、厳密に言えば、意志的でも無意志的でもない中途半端なものになっている。このように考えると、二つの読書は天職への道のりの中で主人公に失望や希望を与える対照的な役割を担っているだけではなく、過去を照らし出すための両者に共通する働きがなにかしらあるのではないかと想定できるのである。以下で、この「なにか」を吟味していくことにする。

3. 読書と忘却

『見出された時』で描かれている読書は、いずれの場合も想起のきっかけとなっていて、ゴンクールの『日記』とジョルジュ・サンドの『フランソワ・ル・シャンピ』は、無意志的想起によってであれ、意志的想起によってであれ、主人公の意識の中で自分の過去と結びつけられている。本論は、以上のことを、主に読書についての主人公の発話を分析対象にすることで明らかにしてきた。

ここからは、ジョルジュ・サンドやゴンクール兄弟が実際に書いた作品の助けを借りながら、主人公が読書の場面では明言しないことに注目したい。プルーストは、架空の文学作品を採用することもできたはずだが、敢えてサンドやゴンクールという実在する作家の作品を読む場面を設定した。「見知らぬ記号」で書かれた「心の中の書物」のもとになる小説内の世界での経験と、小説外から取り込まれたこれらの書物がもたらす経験は、虚構であるか現実にもとづいているかという性質の点で、質の違いがあると考えられる。また、『失われた時を求めて』の主人公は、小説の中の世界しか知らず、小説の外の現実の世界を知ることはないから、このような違いを原理上理解できないと思われる。こうした見通しから、実在する文学作品を読むという経験が差し出すこの完全には虚構とは言い切れないものを、『失われた時を求めて』はどのように利用しているのか考えてみたい。読書の場面では、読者である「私」が想定している以上のなにかが起っているのではないか。

上で見たサンドの『フランソワ・ル・シャンピ』を読む場面では、この話の内容が「謎」として残り続けることは既に指摘した。これは『失われた時

を求めて』の主人公の母が物語の一部を読み飛ばし、子供に「愛の場面³⁶」を伏せておこうとしたために起こる現象である。小説ならではのこのような設定は、主人公の『フランソワ・ル・シャンピ』理解に大きな役割を果たしている。母が読み飛ばすということでのどのような操作がされているのか、ジョルジュ・サンドの小説そのものを改めて読み直すことで検証してみたい。

『フランソワ・ル・シャンピ』には、「私」と「きみ」という二人がこれから語られる話の由来を説明する序文がついていて、そこでは、「私」は二人の農民がこの話を語るのを聞き、それを都会の人にも分かるように理的に、そして、リアリティーを出すために農民の言葉を残しながら、二つの言語を混ぜ合わせて「きみ」に語る、このような設定になっている。「私」が「きみ」に説明するところによれば、これから語られる話の前半は麻打ちが、後半は司祭の女中が語ったのだという³⁷。話の途中で語り手が交代するというこの小説上の工夫を、『失われた時を求めて』の主人公の母が無視していることは明らかである。というのも、『フランソワ・ル・シャンピ』の途中で、司祭の女中は話をやめてしまい、これを受けて麻打ちが次のようにその理由を指摘しているからだ。「信心家のみなさんよろしく、おまえさん、惚れた腫れたの話「愛の物語」となると若鶏みたいに臆病なんだからよ³⁸。」『失われた時を求めて』の主人公の母は「愛の場面」を飛ばして読んでいるのだから、女中が「惚れた腫れたの話」を語ることをためらうこの場面も抜かしているはずである。母は、あたかも、ジョルジュ・サンドが登場させるこの恥ずかしがり屋の語り手のようですらある。

プルーストが、この語りの技法について説明している序文に無関心でなかったことは、『囚われの女』で「私」がゲルマント侯爵夫人の話し方について指摘した次の一節を読むとよくわかる。「彼女は自分の言葉づかい（ほとんど意図せずに田舎っぽくように思えるのとその逆に不自然なほど学識があるように思えるの間をとった言葉づかい）がジョルジュ・サンドの『ラ・プチット・ファデット』の魅力をなすあの相半ばした状態にあると思っていた³⁹。」ここで言及されている『ラ・プチット・ファデット』は、『失われた時を求めて』の主人公が祖母からプレゼントとして受け取るジョルジュ・

³⁶ RTP, t. I, p. 41.

³⁷ George Sand, *François le Champi*, Gallimard, coll. « folio classique », 2005, p. 52. 麻打ちとは栽培された麻をほぐす職業のことを指し、伝説の語り部としての役割を担っていた。

³⁸ *Ibid.*, p. 113.

³⁹ RTP, t. III, pp. 544-545.

サンドの四冊の「田園小説」のうち、『魔の沼』、『フランソワ・ル・シャンピ』に続く第三作にあたるもので、その序文では前作『フランソワ・ル・シャンピ』で採用された語り的手法をどのように発展させるかという問題について「私」と「きみ」の間で改めて議論されている。「ここを一年前に通ったのを覚えているかしら、まるまる一晩、ここで過ごしたのを。そう、ここできみは『シャンピ』の物語を語って、ぼくはそのときに使っていたくだけた感じの文体でそれを書くべきだときみに助言したんだったね⁴⁰。」このことから、ジョルジュ・サンドの小説におけるこのような語りの工夫にブルーストは意識的であったという事実が確認できる。またそれだけではなく、『失われた時を求めて』の読書の場面ではサンドの小説に見られるこのような語りの技術が意図的に排除され、主人公の母が一人で語る物語であるという印象を与えようとしていることが見てとれる⁴¹。

このような操作の結果、複数の語り手によって物語の状況が説明されることはなくなり、主人公の母が一人の語り手としてこの物語を語ることで、読者が書物の内容を真に理解しないままで読むという特殊な読書経験を作り出している。小説の設定によるこのような事態こそ、『失われた時を求めて』の主人公が『フランソワ・ル・シャンピ』を「とりたてて特別なものではない⁴²」子供向けの寓話として受け止めるように促し、母と子の間に成立する「愛の物語」であるという事態を忘れさせることを可能にしている。

⁴⁰ George Sand, *La Petite Fadette*, Gallimard, coll. « folio classique », 2004, pp. 245-246. 『ラ・プチット・ファデット』は『愛の妖精』というタイトルでの宮崎嶺雄による名訳があるけれども、この序文は翻訳されていない（岩波文庫、1936）。

⁴¹ ジョルジュ・サンドの『ラ・プチット・ファデット』は『失われた時を求めて』の執筆中のある段階までは『フランソワ・ル・シャンピ』よりも大きな比率を占めていた。以下の研究が草稿のうちのいくつかの記述を紹介している。Enid G. Marantz, « Les Romans champêtres de George Sand dans la Recherche : Intertextes, avant-textes et texte », *Bulletin d'informations proustiennes*, n° 13, 1982, pp. 25-36.

⁴² RTP, t. IV, p. 462. ブルースト自身は、『スワン家の方へ』の中でジョルジュ・サンドの小説を利用したからといって「私がジョルジュ・サンドが好きだとは思わなかったんだけど」とある手紙の中で断っている（Lettre à Georges de Lauris, décembre 1909, in *Correspondance de Marcel Proust*, 21 vol., Plon, 1970-1993, t. IX, p. 225）。「好き」ということでなにを言おうとしているかはともかく、ブルースト自身の「好きではない」という判断と『失われた時を求めて』の中でその判断の対象である作品が果たす重要性に齟齬がでている典型的なケースと言える。『失われた時を求めて』の主人公の母親が読み飛ばすことについては、以下の論文が精神分析的な読解を提示している。Margaret Gray-McDonald, « Skipping Love Scenes: The Repression of Literature in Proust », *Modern Language Notes*, vol. 104, n° 5, December 1989, pp. 1020-1033.

では、ゴンクール『日記』はどうであろうか。『失われた時を求めて』の主人公が自分で訪れたことがあるという理由から（しかし、それと明確に意識せずに）ヴェルデュランのサロンの様子を描いた『日記』の特定の頁を読むに至ったという点は既に指摘した。これは、「ゴンクールは聴くこともできたし、見ることもできたが、私にはそれができないのだった⁴³」という主人公の言葉からも分かるように、自分の経験を半ば忘れて、ゴンクールの記述を読んで初めてヴェルデュラン邸の様子を知ったかのような印象を持つという小説にのみ許される設定によって、初めて成立するものである。ゴンクールの『日記』が自分よりも適切に経験を描きだしているということで、どのような操作がされているのだろうか。ゴンクール兄弟によって書かれた『文学生活の回想録』そのものに立ち返ることで、この点について考えてみたい（プルーストによる模作と区別するために、本論ではゴンクールによって『日記』につけられた副題の『文学生活の回想録』をもって実際の作品を呼ぶことにする）。

ゴンクール兄弟は1851年から日々の雑感を記す手記をつけていたが、弟ジュールが1870年に早世する前も、兄エドモンが一人で書きつづけたその後も、語り手は常に一人称単数の「私」（je）を使っていた。例えば、1887年の有名な序文では次のように言われている。「ふたりの考え方は双子のようで、さまざまな人々や物事に接したときに受ける印象はいつも似ている、いやまったく同じようで、つまりそっくり同一であったから、この告白は、ひとつの「我」[moi]、ひとりの「私」[je]の心情吐露なのである⁴⁴。」しかし、このような二人の一体性は、弟の死後、エドモンが特に強調しようとした点であることも忘れてはならない⁴⁵。実際のところ、単数の「私」が必ずしもひとつの性質からなるわけではないことはエドモン自身も認めるところで、ジュールは「詩作することや空想の産物を創り出すこと」を好んだのに対して、自分は「専門的研究や歴史」を好んだと1885年3月18日の『回想録』

⁴³ RTP, t. IV, p. 299. ゴンクールが「観察」を重要視したことは論を俟たない通説であるが、その特徴として「聴き取り」を挙げることには、早い時期から疑義がでていることをここで指摘しておきたい。R. A. Sayce, « The Goncourt Pastiche in *Le Temps retrouvé* », in Marcel Proust. *A Critical Panorama*, Urbana ; Chicago ; London, University of Illinois Press, 1973, p. 118.

⁴⁴ *Journal des Goncourt. Mémoires de la vie littéraire. 1851-1895* (1887-1896), 3 vol., Robert Laffont, coll.« Bouquins », 1989, t. I, p. 19.

⁴⁵ この点については、以下の論考を参照。Francine-Dominique Liechtenhan, « Les modèles de l'intimisme dans le *Journal des Goncourt* », *Francofonía*, n° 19, Autunno 1990, pp. 87-95.

で述懐している。そのようなそれぞれの性質がいつしか「精神のもつ異なった傾向や趣味の混成」となったのだとエドモンは言う⁴⁶。

ジュールに代表される客観性にもとづかないゴンクールの語りにプルーストが意識的であったことは、『失われた時を求めて』の主人公が読むゴンクールの『日記』を丁寧に読めばよくわかる。『日記』の冒頭で、ヴェルデュラン家の邸は「代々のヴェネツィア大使が使用した館」で、室内には「さる有名な宮殿から運んできた喫煙室」があるというヴェルデュラン氏の自慢話が紹介されている。「喫煙室」には、「縁石にサンソヴィーノによる聖母戴冠のモチーフがあしらわれている井戸の縁石」があつて、来客の灰落とすになっているという。「この宮殿の名を忘れた⁴⁷」というゴンクールは、しかし、同じ『日記』の後半で、「食堂からヴェネツィア風の喫煙室に移り」、「みなが煙草を吸う部屋に据え付けられた盾形紋章の格天井は、バルベリーニ宮殿から持ってきたものである」と断言することになる⁴⁸。ここでゴンクールが話題にしているのがヴェネツィアの「さる有名な」宮殿なのか、高名なローマのバルベリーニ宮殿なのか、いくつかの指摘はあるものの⁴⁹、曖昧なままである。これは些末な問題ではあるが、しかし、ゴンクールの客観性がそれほど確かなものではないとプルーストが意識していたことを表している点で重要である。同じ『日記』の中で「私は忘れた」と何度か記されているので⁵⁰、含意されているのはゴンクールの客観性だけではなく「不正確さ⁵¹」

⁴⁶ *Journal des Goncourt, op. cit.*, t. II, p. 1145.

⁴⁷ *RTP*, t. IV, p. 288. ヤコポ・サンソヴィーノ (1486-1570) はフィレンツェやローマで活躍した建築家で、後にヴェネツィアに移って、サン＝マルコ図書館などを制作した。彫刻家としては、ヴェネツィア総督宮の「巨人の階段」にあるマルスとネプチューンなどの作品がある。

⁴⁸ *RTP*, t. IV, p. 294.

⁴⁹ 『見出された時』につけられた鈴木道彦の訳註 (集英社文庫、2007) によれば、ローマにある重要な建築で、バルベリーニ家出身の法王ウルバヌス八世の命で起工された。ピーター・コリアーは、ヴェネツィアにバルベリーニ宮という名の建築はないことを認め、バルバリゴ (Barbarigo) 宮である可能性を指摘している (Peter Collier, *Proust and Venice* (1986), Cambridge, Cambridge University Press, 1989, p. 49)。

⁵⁰ 「名前は失念したが of がつくある太公夫人」(ジェルバトフ大公夫人)、「その頃、ヴェルデュラン夫妻が住んでいた、もう名称を覚えていないある通りにあった邸」(モンタリヴェ通り)と『日記』にある (*RTP*, t. IV, p. 289 et p. 293)。草稿を見るとバルベリーニやモンダリヴェの名前が後から消されていることがわかる (Jean Milly, « Le Pastiche Goncourt dans *Le Temps retrouvé* », *Revue d'histoire littéraire de la France*, 71^e année, n° 5-6, septembre-décembre 1971, p. 818, p. 819 et p. 821)。

⁵¹ プルーストはある手紙でゴンクールは「注意深いというよりは不正確である」と指摘している (Lettre à la comtesse de Lauris, 10 juillet 1912, in *Correspondance de Marcel Proust, op. cit.*, t. XI, pp. 160-161)。

でもあることがわかる。このように、ブルーストはゴンクールの「不正確さ」を理解しながらも、あえてその客観性を『失われた時を求めて』の主人公の口を通して強調しているのだ。

こういった操作の結果、『見出された時』の「私」は、ジュールとエドモンがそれぞれのやり方で日々の印象や観察を記していくものとして『日記』を受け止めるのではなく、ゴンクールが人の話を聴くことや見ることを得意とし、自分以上に自分の経験を知悉しているという感想を持つようになる。小説の設定によるこのような事態こそ、『囚われの女』で聴いたはずの「代々のヴェネツィア大使の館」をヴェルデュラン夫妻が利用しているという大学教師ブリショの説明も⁵²、そしてなによりそこで起きたもう一つの「愛の物語」も、主人公が思い出せないでいる原因としてある。

最後にこの忘却について指摘しておきたい。『囚われの女』で、ヴェルデュラン夫妻はシャルリュス男爵の連れてきたヴァイオリン奏者モレルを自分たちの味方に引き入れるため、男爵をモレルのもとから引き離しておくようにとブリショに指示を出す⁵³、そのときこの大学教師は主人公に加勢を依頼し、哀れな男色者との話をできるかぎり長引かせる画策をする⁵⁴。「私」といって、それに乗じる形で、その晩演奏された器楽七重奏の作曲者ヴァントゥイユの娘とその友達ヴェルデュラン家にやってくるのかどうかをシャルリュスから聞き出し、恋人アルベルチーナが自分に隠れてなんとか二人の女友達に会おうとしているのではという疑念を晴らそうとする⁵⁵。主人公がシャルリュス男爵を引き留めるこの場所は、「煙草を吸いに行こう」という二回にわたるブリショの誘いから分かるように⁵⁶、他にもない「さる有名な宮殿から運んできた喫煙室」に他ならない。そこで「私」は自分にとってもっとも切実な疑いを払拭しようとしたにもかかわらず、ゴンクールの『日記』で「喫煙室」が喚起されても、その室内の様子もアルベルチーナとの「愛の物語」も思い出すことはない。ゴンクールの『日記』に自分の経験を読むという小説ならではの設定は、「喫煙室」について記された細部に主人公の関心をひきつけることで自分だけの「愛の物語」を忘却させてしまう結果となっている⁵⁷。

⁵² RTP, t. III, p. 707.

⁵³ RTP, t. III, pp. 784-786.

⁵⁴ RTP, t. III, p. 787, pp. 790-792 et pp. 798-812.

⁵⁵ RTP, t. III, p. 790.

⁵⁶ RTP, t. III, p. 784 et p. 787.

⁵⁷ 『日記』の中で単なる事象を羅列させることで、ブルーストはゴンクールに「悪意」

本論は、ジョルジュ・サンドの『フランソワ・ル・シャンピ』とゴンクールの『文学生活の回想録』に立ち返ることで、それらを読む『失われた時を求めて』の主人公の記憶から抜け落ちているもの、忘れられたものがあることを示そうとした。「私はXを忘れた」という状態は一般的には表明できないものである以上、忘れられたものの存在を証明することはできない。しかし、実在する作品とそれらを読む虚構の「私」の感想を比較することで、ブルーストが『失われた時を求めて』の主人公に与えようとした認識しえないものの形がうっすらと見えてくることもまた事実なのである。

おわりに

『見出された時』の二つの読書は、幼年期の読書とはまったく異なる機能を持っている。サンドの場面では、読むという所作が過剰に注目され、そこで読まれる内容から目をそらすようになっている。ゴンクールの場面では表明される物語内容ばかりに目が行き、結果、自分が読みたいものを読んでいくという所作が自覚されなくなっている。いずれの場合も、『失われた時を求めて』の中で構築された設定がそのような読書の状況を作り出しているのであって、このような工夫は主人公の過去を明るみに出すと同時に、その時点で経験した「愛」を抑圧するという効果を持っている。

物語の上では、それぞれの読書は文学という未来に対して主人公を幻滅させ希望へと導く心理的要因として機能しているが、小説の構造上では、それぞれが記憶の層の積み重なった過去へとつながり、特に主人公が語らない過去をも暗示させるものとしてある。幼年期の読書と大きく異なるのはこの点で、読書は、天職に対しての失望と希望という「書く」物語の波乱を描き出すとともに、主人公が語らない忘れられた記憶、つまり「書かれない」かもしれない物語に光をあててくれるのだ。

を抱いていたという説がある。多くのブルースト専門家だけではなく、ゴンクールに肩入れしているものからも同様の指摘があって、例えば、斎藤一郎がこの『日記』の「喫煙室」について否定的に触れている（「ブルーストと『偽ゴンクール日記』」、『文学』、1993年10月、134頁）。私はむしろ、この横作はブルーストのゴンクールに対する強い興味から生まれたものと考え。だからこそ、ゴンクールの『日記』はブルーストの小説の中にこれほど有機的に挿入されているのではないか。